

ばけばけ

内海メンタルクリニック

井上 和 臣

例年と変わらず3月を前に「談話室」への投稿依頼が届いたものの、発想の枯渇著しく、数日悩んだ末に、それでも折角の機会と思ひ定め、書き始めたところです。まとまらない内容にお付き合いください。

ここ数か月の日課に、表題に挙げたNHKの朝ドラがあります。時には朝に二度、昼に一度と見るうちに、主題歌を一緒に歌うようになっていきます。先日はBK所属のアナウンサーが朗読する『怪談』¹⁾を録音しました。

そして、「葬られたる秘密」²⁾の一部(図)を何の脈絡もなく、1月末に母校で開催された研修会³⁾で朗読(?)してきました。

その折りは、認知の定義と関連づけようとしたのですが、上手く行きませんでした。それで遅ればせながら考えてみました。

認知は情報処理と同義に解されています。ですが、それが少々不満で、個人的意味づけ・解釈にこだわりたいのです。情報処理は体験様式を第三者的に説明するには適しているかもしれませんが、一人称の体験内容の了解に資するものでしょうか。

お園に宛てた艶書は焼き棄てられ、和尚の死と共に秘密は葬られてしまいました。

認知から病態に迫ろうとする精神療法には、一人称の秘密が溢れています。もちろん治療上は秘密が表出される必要はありません。しかし、同意のもとであったとしても、秘密を語ってもらうことに、どこか釈然としない居心地の悪さが残るのです。

A DEAD SECRET (葬られたる秘密)



- むかし丹波の国に稲村屋源助という…商人が住んでいた。この人にお園という…娘があった。…源助は…娘を京都にやり…上品な芸事を修業させるようにした。
- お園は結婚後四年目に病気になり死んでしまった。
- 葬式の…晩にお園の小さい息子は、お母さんが帰って来て、二階のお部屋に居たよと云った。
- 和尚は…お園の戒名を呼んで話しかけた『拙僧は貴女のお助けをするために、ここに来たもので御座る。…その筆筒の中には、貴女の心配になるのも無理のない何かがあるのであろう。貴女のために私がそれを探し出して差し上げようか』影は少し頭を動かして、承諾したらしい様子をした。
- …一番下の抽斗の貼り紙の下に何か見つかった——一通の手紙である。『貴女の心を悩ましていたものはこれかな?』と和尚は訊ねた。女の影は和尚の方に向った——その力のない凝視は手紙の上に据えられていた。『拙僧がそれを焼き棄てて進ぜようか?』と和尚は訊ねた。お園の姿は和尚の前に頭を下げた。『今朝すぐに寺で焼き棄て、私の外、誰れにもそれを読ませまい』と和尚は約束した。姿は微笑して消えてしまった。

認知 cognition: 個人的意味づけ・解釈 idiosyncratic meanings/interpretations

図 葬られたる秘密